オールナイトニッポンへ
ー松山千春の新しい旅立ちー

松山千春は十月二日かぎりでSTVラジオの「サンデー・ジャンボ・スペシャル」の「千春のひとりうた」の番組からおりて、毎週月曜日深夜（火曜午前〇時から）の「アタック・ヤング」はそのままで、五日から毎週水曜日の深夜（木曜午前三時から）の「オールナイト・ニッポン」にディスク・ジョッキーのレギュラーとして出演することになりました。

十月は各放送局とも番組改編の時期で、千春の場合は、これまでの毎週、足寄から札幌までの往復に加えて東京までの往復となれば一週間のあいだほとんど歌づくりの余裕もなくなつてしまうこと、そこえもつてきて「サン・ジャン」が毎週公開放送になつてからというものは、正午開演だというのに早朝からヤングが席とりのために行列という状態になり、これが〃エキサイト〃して毛布持参の徹夜組も現れるし、札幌周辺ばかりでなく土曜から日曜にかけかなり遠方からムリをしてSTVホールへかけつけるヤングもふえてきたので、ご家庭へのご連絡も考えて、次回の九日からは大ホールからスタジオ（二十名収容）にうつるのを機会に千春はレギュラーからおりて、そのかわりに各地でのコンサートでお目見得することにしています。

北海道だけに縛込まらないで「オールニッポン」に出ることが千春のプラスになるというSTVのすすめで出ることになつたものの、多くの方々から『千春は段々遠い存在になつていくようで淋しい』と心配されてしまうのではないかと心配されていますが、第一回の「オールナイト」を聞いた方は諒解していただいたのではないでしょうか。

千春は相変らず北海道のローカル歌手としてふるさとを語り、家族を紹介し、自分の身の上ばなしのなかからいろいろな歌のうつりかわりをレコードで流しながらフォーク歌手をめざした立場を明らかにして、最後に持ち歌の〃旅立ち〃と〃大空と大地の中で〃を歌いつつ『北海道からは離れない』と語つているように遠い存在になるのではなくあくまでも北海道ー足寄を根拠にして毎週「アタ・ヤン」で五十分、「オールニッポン」で二時間、札幌と東京でガンバることになつたわけで、道産っ子の歌とおしゃべりを日本中にバラまく千春の新しい旅立ちということです。

レコードの新曲は十一月にシングル盤を、明年一月にアルバム盤を出す予定になつています。

主筆の室

この十月一日で六十二才を迎えましたが、多くの方々からお祝いのカードや数々のお便りを頂き、ありがとうございました。

☆

十二月十六日になれば、千春と四十才の差がつくので、まるで孫のような存在ですがー。

☆

私の顔を見たいというお便りが多いのでこの欄のカットにしましたが、これは取材から活字ひろいから製版、印刷のすべてを一人でやっている〃たった一人の新聞社〃ということで、NHKや日本テレビやSTVになど五回ほど出演したときのひと場面で、本号に掲載した千春の写真は、コンサートに同行した横山和之さんの作品です。

☆

五日の旭川のコンサートには、はじめて長女の絵里子が客席で千春の歌いぶりを見てきましたが、あの広い市民文化会館が満員で、立見でもよいからという方々も入場して頂いたので、超満員となりましたが、男性の客も多かつたそうです。

☆

特別に詩歌や音楽の勉強をしていたわけではなく、話し方も乱暴で美男子でもないのに、どうしてこんなに客をあつめるのか不思議ですがー。

家業はいなかの小さなローカル新聞で、家が貧しいために大学へもやれなかつたので、足寄高校を卒業するや家業を助けるために北見市の親戚の食堂で一年間はたらいて帰つてきて、セコイとフオーク音楽祭に出たのがキッカケで、こちらから頼んだわけでもないのにSTVから声がかかつて「サン・ジャン」に出ないかとなつたものです。

STVとしてはいなかの無名の新人をいきなりレギュラーに起用することには異論があつたようですが、このあいだ亡くなつた竹田健二ディレクターが幹部を説得して「千春のひとりうた」を昨年四月からスタートさせました。

そのときの条件は、毎週一回足寄から札幌へ通うこと、新曲二曲をつくつてくること、あとは父の新聞発行を手伝うことでした。

千春は毎週の二曲に命をかけるようにして札幌通いをつづけているうちに昨年の秋ごろからレコード各社から話しがあり、STVの系列のニッポン放送の社長がキャニオン・レコードの社長でもあつたのでキャニオンから本年一月に「旅立ち」でデビューしました。

☆

放送局にもレコード会社にも、こちらから頼み込んだわけではなく、自然のなりゆきでいつのまにかヤングのアイドルみたいに、スターでもあるかのように扱われていることに本人はもちろん家族も面喰つているわけで、いわゆる芸能人になつた気持はないことです。

☆

生来の貧乏ぐらしからの親思い、姉弟思い、友達思い、ふるさと思いの性格が歌にも思いやりがこもつているというのか、一〃語り方〃は乱暴ながらザックバランに生活体験を語つているーこれが千春物語のフォークかもしれません。

☆

この「千春特集号」のご購読希望の方には一部一千円で、ご送金の方法は郵便局で一千円の定額小為替を利用して普通郵便でお便りの中へ入れて下さるのがもつとも安全で便利です。

読者の室

私は（千春の）お父さんに一度お礼をいいたかつたのです。今は、中学三年生で来年は入試をひかえています。つつぱりたくつて、いろいろ悪いことをしたんです。親にも反抗的であつたし、学校をさぼつたりもしました。

そんな悪な私の目をさまさせてくれたのが千春がいつも話すお父さんの話だつたのです。

ある日、ラジオから流れてくる曲〃旅立ち〃を聞いてから千春のファンになりました。コンサートも行きました。その中で千春がお父さんのことをはにかみげに話していました。私にとつて父とはなんだろうかつて考えさせられました。

今、自分のしていることは、父を悲しませていることだろう。それでも父は、私をいつもやさしく見守つてくれる。私はあまえすぎているのかもしれないつて感じたんです。父は今まで何回他人に頭をさげたか…それを思うと、父にすまないと思つたんです。

父は私のいうことを、きちんと聞いてくれたけど、父のいうことを私は、いつもそつぽをむいて聞かないふりをしていた。それで、いいと思つていたなんて…今、思うと、とつても自分がはずかしいんです。

息子と父親、娘と父親、なんとなくちがうかもしれないけど、子供にとつて父親にはかわりはないでしょう。私はこれから少しずつ父に恩返しをしなくてはなりません。

きつと素直になるつてきめたんです。そして早く父に恩返しをしなきゃ。それにはまず高校に入ることがんばります！

本当にありがとうございました。私にとつて父の存在は偉大なものだということを知しえてくれてありがとうございます。

（帯広のM・Wさん）

★

先日網走で、貴方様のコンサート（千春の）を見て感動した一人です。

私は二十六才の主婦ではとんどが学生なので恥かしい気分がしながら妹と二人で行つて見て、本当に良かつたと思つています。

妹と二人で貴方様の歌に精いつぱい拍手し応援して来ました。

私は、二年ぐらい前、結婚して、足寄から来てこの網走に住んでいます。

貴方の歌を初めて聴いたのは、私が二十才ぐらいで足寄の公民館だつたのです。（千春が高一のころ網野のグループと十円コンサートをひらいた時代）

その時は、こんなに有名になるとは思えませんでした、ごめんなさい。

ですから、かなり前に、新聞で貴方の事を知りましたが同一人物とは思いませんでした。成功おめでとうございます。

苦しい事、つらい事を乗り越えて、今の歌があるんですね、コンサートを聴きながら、一緒になつて涙を流してしまいました。お父様の作つた歌がとても心にしみています。

私にも足寄に両親がいます。出来ればずつと側にいてあげたいと思つていましたが、結局、離れて来てしまいました。今では両親が元気でいてくれるのが心の支えになつています。

貴方は足寄の町を出ないで続けたいとおつしやいましたわ、お父様の為に。

私もお父様の新聞は知つています。貴方はきつと心のやさしい人柄なのですね。貴方の作つた歌にも思いやりが感じられます。

これからの活躍を心から期待します。コンサートを見て書かずにはいられない気持でした。ごめんなさい。

（足寄が故郷の主婦より）

毎日、多くのお便りを頂き、まことにありがたく存じます。勝手ですが、そのなかから適宜掲載させて頂きます。